

series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第二十七章

Kidnap-2

峯村 明

リ・コンストラクション

登場人物

27・Kidnap-2

264.

265.

266.

267.

268.

269.

270.

あとがき

奥付

登場人物

桧山 健	H & L 財団・財務部門勤務
〃 ひろ	健の妻
〃 真	健・ひろ夫妻の息子
サーディク	エドミールのステージネーム
X & Y	サーディクのボディーガード
竜門渕 優美子	メルノ
ベネトナシュ	死神

264.

サーディクとの面会は緊張と興奮を伴った。

日本での失態の謝罪をし、知っていることをできる限り伝えようと思った。彼はヨーロッパで活動しているらしいし、自分は日本、間宮宮司は「今なら確実にブリュッセルにいる」と教えてくれた。この機を逃すと、捕まえるのはひじょうにむずかしいといった口ぶりだった。じっさい、サーディクは二日後に帰国する予定だったのだ。

この時代において、過去世の記憶や魂の記憶にどういう価値があるのか、ユミコにはわからない。そんなものは——価値など——ないのかもしれない。離日前にそれとなく探してみたが、過去世にしる魂にしる、記憶をもっているという人間にはまったく出会わなかった。逆に怪訝な顔をされたものだ。「どうしちゃったんですか？」と。

ただ、彼女がひじょうに古い家の出であることを知っている者は、なんとなく、うなずけるようだった。先々代当主の代で一切の神事から退くという決断をした竜門渕家はもはや人の記憶からすっかり消えようとしているが、当主直系の人間は神的存在と交感できる力をもっていたと、知っている者は知っている。

サーディクとの面会が叶ったのも、その力のおかげかもしれなかった。ようするに、ミツハの力の残照。

そしてユミコにはもうひとつ、ブリュッセルを訪れたい目的があった。もうひとり、逢いたいひとがいる。病室に置き忘れられた『キリガミネ探訪』を手にとった時にやってきた予感だった。

（桧山さん？）

十年近くも前に、手渡そうとして断られ、かわりに『キリガミネ探訪』が彼の手に渡った。その『キリガミネ探訪』は月日を経て、彼ではない、別の人間に携えられてユミコのもとへ戻ってきた。

そして、桧山健もまたブリュッセルにいるという、いわれのない確信。

ずっしりとした重さを手に感じながらユミコは夢想する。目に見えない糸の存在を感じる。やはりあの原稿は彼のもとへ行きたがっている。だから、渡さなければ。また断られるかもしれないけれど……彼が目を通すにせよ、通さないにせよ、後の処分は彼にまかせよう。

奈々子が遺した原稿を桧山健に託したら、帰ろう。日本へ。それで私の目的は果たされる。

265.

館内をひた走るひろは——どん！——という衝撃に思わず足がもつれ、立ちすくんだ。足も頭も動かない。

（なに？ なんなの？？）

それはあまりに異様で、あまりに不吉な振動だった。

どきどきと高鳴る胸を両手で押さえる。心臓は踊り、喘ぎがとまらない。そこを、ふいに腕を掴まれ、「きゃあああああ！！」思いきり声をはりあげてしまった。

「マミヤ！ マミヤでしょう？ だいじょうぶ、私です」

「え？ あ——」

驚きで頭が真っ白。ぽかんと口をあけ、腕を掴んでいる相手をまじまじと見る。

「——へ——！？」

「よかった、やっぱりマミヤね、ええ、私です。それより、どうしたの、なにを慌てているの？」

プラチナブロンドを無造作にまとめ、作業服のようなツナギを着、編み上げブーツをはいたその人は、本当に工具を片手に仕事をしている作業員か何かのようで、ひろの興味をぜんぜん引いていなかったし、目にも入っていなかった。ひろの張りつめていた神経がぷつりと切れたのは、この女性がエウメロス王国の王女だったというかつての思い出ではなく、まさに地獄に仏の様相だったからだ。

「ヘルガさま……」とうめき、その場に泣き崩れた。泣いている場合ではなかったのだけど。

「だいじょうぶですよ、私が来ましたからね。さあ、わけを話せる？」

懐かしく、優しく、頼もしい声。

ひろは子どものように声を放って泣き、ヘルガの手にすがりついてよろめきながら立ち上がった。「行かなきゃ——」

「マミヤ？」

「真が——帰ってきたわ——」

非常警報が鳴り響いたのは、その直後である。

266.

こちらはシパドの介入によってウィンディとの取引に失敗、財団本部へと取って返す桧山健とX。

パウジーニを呼び出そうとした健の携帯が鳴った。見れば未登録の番号。思わずかっとなり、舌打ちしてしまう。だれだいったい！！ と罵りながら切ってやろうと思ったがふと気が変わった。慌てるな。感情的になってはいけない。真からかもしれないじゃないか。

「——はい？」

《あ、ヒヤマくん？ ワタシだよ、ベネトナシュだ。ウィンディ嬢から約束の連絡がないんだが、きみ、知らない？》

「ウィンディ？ 今頃シパドとやりあってるんじゃないのか？」

《え——誰だって？》

「シパドだよ。おたくの知り合いだろ？」

《げ——なんで？》

「なんでって。知るもんか。シパドはかなり機嫌を損ねていた。ウィンディがどうなったか、自分で確かめるんだな」

《きみは何モノだ》それは地獄から響いてくるようにぐもった昏い声だった。

「誰だっていい！ そんなことより、おまえのところに男の子が——」

《あ、こら、返せ返しなさい！》

《——パパ！ 助けて！ ——パパ——》

いくつもの雑音が重なり、悲鳴。間違いない、真の声だ。

《まったくもー、なんて行儀の悪い子だ！ 人のものに黙って手をだすとは！ 親の顔が見てみたい！》

電話の向こうでずっと音が鳴っている。低い、機械の駆動音のようだ。

（これは——！）二人の会話はスピーカー状態になっていて、運転席のXも逐一聴いていた。（総裁！ これはヘリコプターのローター音です！）

（ヘリコプター！？）

反射的にフロントガラス越しに空を見上げる。曇った空に、まさにヘリコプターが一機。（アレか！？）

なんということか！ 空の上にいるとは！

＊

「ベネトナシュ」健は努めて冷静に言った。真は今、手の届かない所にいる。「子どもをさらってまでして、何がしたいのだ。ウィンディはサーディクを確実に手に入れるためだと言っていたが、そうなのか？」

《そうとも言えるし、そうじゃないとも言える》

こういう交渉はXの方が得意だろうなと、ちらと思う。彼らボディーガードは対象者を守るために様々な知識を持ち、訓練を積んでいる、その道のエキスパートなのだ。だが息子を守るのは父親の役目である。父親が前線に立つしかない。下手でも、悪手でも。

「それはどういう意味だろう。はっきり聴かせてもらいたい。オレの息子をさらった目的は何だ」

運転席のXがこぶしを握ってゆっくり回して見せた。時間を稼げという意味らしい。

健は電話しながら上着の内ポケットから小型のタブレットを取り出した。それで本部のパウジーニを呼び出す。通話を傍聴してもらおう。

《気に入らない、んだよね》と、のんびりした口調。

「なんだって？」

《気に入らないのよ。キミんとこの、H&Lっていう》

「なにが気に入らないんだ」

《なんだっけ、『おのれの魂に忠実に生きる者たちのために』、だっけ？」

そこでベネトナシュは、ぷっ、と噴いた。

「あああ、しつれいしつれい、キミたちは大マジメだったんだ！ だけどさあ！ 魂に忠実に、ってなに？ なんなのそれ？ 楽しいの？ おいしいの？ ねえ？ ヒヤマくん？」

「自分が理解できない言葉をからかっておもしろいか」

《うん。おもしろい。久しぶりにこんなおもしろい言葉を聞いたもんだからさ、これはぜひもっと詳しく知らなくちゃと思ってね、それでウィンディ嬢を送り込んだってわけ。ヨーロッパの都会の中にあるお城で働けるっていうんで、彼女、大乗り気だった》

「で？ なにがわかった？」

《いやーそれが、ガードがなかなか堅くてね、そのわりに仕事は簡単すぎてウィンディったら、やりがいが無いだの、いい男がいないだの、文句いうじゃない。そんなとこへあのサーディク先生てのがやってきて、アレが欲しいと言いだしたわけ。まあ、H&Lの極秘データなんてものをついに手に入れてくれたからご褒美にちょうどよかったのさ》

健は爆発しそうだった。ばかばかしいにもほどがある。真はそのとばっちりですらわれたというのか！！

《そうなんだよ、彼女は美しいものが好きでね、なかなか趣味がうるさい。だから人質にも品が必要だとかいって、自分でさがしだしたの、この子を。サーディク先生との関係？ いらないよそんなの。しかし、ホントにかわいいねえ。とって食べちゃいたいくらい。いったいどんな両親から生まれればこんなかわいい子ができるんだろうねえ》

267.

「その子に何かあったら、両親は黙っていないだろうとは、思わないのか？」

真が実の両親に似ていない理由など、両親はよくわかっている。彼は魂の似姿であるというだけのことだ。

《えー？ そうやってぴーちくぱーちく騒ぐ以外に、キミになにかできるの？》

「今ゆっくり考えているところだ。

ベネトナシュ、おまえはH&Lの極秘データが欲しかった。ウィンディはサーディクが欲しかった。データはおまえの手元にある。たった今、『手に入れた』と言ったのだから、コピーがあるということだ。

しかしウィンディはサーディクを手に入れるのに失敗した。シパドが邪魔したからだ。サーディクに固執し続ける限り、シパドは邪魔し続けるだろう。だからサーディクに手を出すなとウィンディに忠告したんだが。シパドの性格はおまえだってよく知ってるはずだ」

《ちょ、ちょっと！》

「なんだ」

《そりゃああの悪魔女のうざい性格はよく知ってる。うっかり共闘しちゃったせいで別れるのに何百年もかかったんだ。もう会わなくて済むと思ったのに！　なんでまた現れて——まさか、ワタシのことが忘れられないのか》

「話をよく聞け！！」健は思わず電話口に怒鳴った。「シパドが執着してるのはサーディクだ！　おまえじゃない！！」

《わ、わかってる、ちょっとおちゃらけてみただけじゃないか、いやだなあ、冗談の通じないヒトって。で、その、サーディクって何モノ？ ただのアーティストじゃないの？》

「おまえは——本気で言ってるんじゃないだろうな——シパドは確かにとんでもなく思い込みの強い女だが——そんな女がただのアーティストに執着すると思うか！？」

《だ、だから——サーディクって何モノ？》

「ベネトナシュ、おまえさんざん笑ってたろ、魂に忠実に生きることについて。楽しいのか。おいしいのか。彼はまさにそれだ。彼の魂は芸術を愛し、叶わなかった魂なのだ——」

——だからか！

健はふと、胸落ちの感覚を覚えた。だからシパドはサーディクあるいはエドミールに惹かれるのか！ 彼が己の魂を生きようとしている故に？

「おまえにこういう話は理解できないかもしれない。オレの記憶に間違いがなければ、おまえはたしか地球外、大熊座からきた生命体。魂というものを持たないのだろう。持っていないものを理解しろというのは無理だ。だが、おまえがかつて共闘したシパドは、どんな性格にせよ、地球で生まれた人間。今彷徨っているのは彼女の魂だ——」

ヒューダーはベネトナシュの出自などほとんど知らない。記憶の断片と情報の断片、ようするに、口から出まかせだ。このことが大勢に影響があるとは思えなかった。

《ワタシが大熊座からきた？ ちょっと。それ、なんのこと？》

「なんのことって——言ったとおりだが」

《いやいやいや！ ワタシはふつうに人間だよ？ ヘンなこと言ってもらっちゃ、困るよ！》

ベネトナシュは本当に困ってるようだ。声がうろたえている。

(なんなんだこいつは！！)

話がまるで噛み合わない。それとも、噛み合わないフリをしているだけなのか。つかみかけたと思っただけ口はするりと手を抜けてしまう。健は焦りと、混乱と、あろうことか、疲れさえ覚えてきた。息子を取り戻さねばならないというのに、交渉に疲れた、とは！

目に入る汗をはらおうと、ふと空を仰いだ彼は、凝固した。最前まで一機だったヘリが、一機増えている。

268.

（なんで二機いるんだ、ベネトナシュの仲間？）

健の目線と様子にXはすぐに反応した。（二機ともベルギー航空構成部隊（空軍）のヘリです。つまり軍用機）

軍用機。

「ベネトナシュ、話をもとに戻そう。おまえのところにいる男の子を、返してくれ。条件があれば聞こう」

《条件？ そうそう、キミのところにワタシのお仕事のジャマをしてくれるヒトがいるよね。ワタシが送ったメールの中身を消しちゃうようなヤツ。そいつと交換しよう》

「言ってる意味がわからんが」

《またまた～。とぼけたってダメだからね。そういうことができるヤツがそっち側にいるって、ちゃんとわかってんだから。ご主人さまのおっしゃることに間違いはない》

「ご主人さま？ だれのことだ？」

《おっと。気にしない気にしない。とにかく、そいつと交換だ。ほかに条件はないから》

「——男の子を電話口にだしてくれ。話がしたい」

《条件は呑むの？ 呑まないの？》

「オレひとりで決められない！」

《あ、そっか。キミにそんな力はないんだったつけ！ わかった、じゃ、六時間待たげる。それだけあれば充分でしょ、じゃーねー》

あ、という間に電話は切れてしまった。おどろくような逃げっぷりに健は呆然自失する。タブレットに目をやると、パウジーニからメール。

『事態はだいたい把握しました。本部館内には一般人がいるため、念のために全館封鎖しました』

「だからか！ Yと連絡がつかないのはそのせいか！」Xが地団駄踏んでいる。「とにかく——本部へ戻らねば！！」

269.

どこからどうやって調達してきたものか——

ベネトナシュは軍用ヘリを小手先で操っていた。乗務員はひとりもない。すべて彼の魔力によるものだ。

選んだ理由だけははっきりしている。足が速いからだ。

誰もいないコクピットで操縦桿が勝手に動いている。

飛行を制御する機器もまた勝手に動いているが、通信機器はとうに切ってある。「操縦士は誰だ！？」「行く先はどこだ！？」「飛行目的を言え！！」とひっきりなしにうるさかったからだった。

人質の父親を電話でたっぷりからかった後で、ベネトナシュは上機嫌で北欧の空の旅を満喫しようとしていた。

H&Lの極秘データというお土産も手に入れた。あとはもうひとつのお土産と一緒に昏い地の底の陰鬱な主のところへ戻ればいい。緑深い地上、雲間から射し込む陽が眩しい。

（あーやだやだ、太陽なんて！）

陽光を浴びずに済むよう、機首を東へ巡らす。ヨーロッパの入り組んだ国境線のことなど、ちらりとも考えなかったし、仲間のウィンディの無事さえ気にならないようだ。

イリチャは人間の形態でヘリの上、後方からそっと近づいた。回転翼に触れないよう、横目で伺いながらすばやく側面に回りこみ、いつとき物質形態を解いてヘリの機体を通り抜けて内部に潜り込む。

軍用だから中はもちろん、居住空間などというしゃれたものはない。真は後部のがらんとした貨物室に放り込まれ、床に転がされていた。

(五歳の幼児にこれはないんじゃない！？)イリチャは思わず目を吊り上げる。

(真は思いきり甘やかされた箱入り坊やだってのに！！ これで六時間も保つわけないだろ！？

どんなに我慢したって十分がいいとこさ！ もうちょっと、こう.....おやつを用意してあるとか.....待遇考えてくれてあったら、ぼくだってそれなりに手加減するんだけどね！ これはあんまりだ！！ おぼえてろ、ベネトナシュ！！)

物質を凝固させ、人間形態を固定させる。本体を外へ連れ出すためだ。

(これだと力がかなり限定されちゃうけど、しょうがないや)

それは本来、実体をもたないベネトナシュにとっても同じはずで、力の限定はお互いさまといったところだ。

軍用ヘリで悠々と遊覧を楽しんでいる死神の背中を見ながら床近く、姿勢を低くして伏せ、

(真.....！)と呼ぶ。(こっちへおいで！ そっ—と！)

びくっと飛びあがった真の目をとらえ、掌を上に向け、指を動かして、こっちへ、と招く。

真はコクピットを気にしながらそろそろと四つんばいになり、そろそろと這ってきた。薄手のシャツの襟の間から細いのだ元がのぞいていて、アザが見える。ベネトナシュがいちど力任せに首を絞めた、指の跡だ。「声をだすんじゃないよ」と言って。

真は相手と額をつき合わせて(——だれ?)という顔をした。

真の真っ黒な目をしっかりとらえて伝える。(むかえにきたんだ。かえろう。パパがまってる)この子にはこれがいちばん効く、とイリチャは知っている。

真は自分より少し上にある相手の目をまじまじとみた。黒や灰、青、緑のは知っているがこういう
紅い色は初めてでものめずらしくもある。相手は唇の片方をちょっともちあげて微笑した。
それをみて真は(パパとおんなじ笑いかただ)と思った。でも……(ぼくをむかえにくるのは、ぼくが
知ってるひとだけだよ)
ようするに、知らない人についていってはいけないということだ。

イリチャは微笑したまま言った。(おまえはぼくをよく知ってる)
真は抵抗するように首をちょっと傾げる。
(ぼくはおまえだ)つき合わせていた額をくつつける。

*

(な?)
(——うん)
(おまえはあの黒いやつにひどい目にあわされたらろ? でも泣かなかった。えらいぞ)
(ぼくは泣かない! だって男の子だもん)
(よし。いいこだ)
いいながら真の首筋に手をまわし、赤黒いアザを消してやる。人のいい両親たちはこんなみに
くいものをみたら卒倒してしまうだろう。
(さ。かえろう。みんな心配してる)
そっと額を離し、体を起こそうと動きかけたとき、上からなにか降りてきた。

*

「まあ待ちたまえよ」

イリチャと真の間の床にカマの刃が突き刺さっている。コクピットをカゲのようにすり抜けたベネ
トナシュが間近に立って、見おろしていた。

「おや、久しぶりじゃあないの! ええと……そうだワタシはキミの名前を知らなかったっけ」
「おまえに教える名前はないよ」
「ふ……ん……小憎らしいことだね」

「わるいけどちょっと急いでるんだ、話はまた今度ね」
「あこらまで!!」

イリチャはよいしょと真を抱き上げて、貨物ハッチをちらりと視認する。

「とりあえず返してもらってからね。冥界王にはまあよろしくいって——」

言いながらハッチを思いきり蹴った。数値にすれば数値はあろうかという蹴りに頑丈な軍用ヘリのハッチはロックごと壊れてあっさりと口を開けた。

「待て！！ 逃がすか！！」

いきなり生じた気圧差に外へ吸い出されそうになりながら、ベネトナシュは妙な形のかぶり物を飛ばされまいと必死にふんばる。

真にしっかりつかまっているように言い聞かせ、壊れたハッチから外へ脱出しようとした、その時だった。

ハッチと反対側の窓の外で火花が飛んだ。そして機体を揺さぶるような気持ちの悪い衝撃と、金属を小さく重いものが叩く、低い連続した音。

くらくと傾いた機体の床を懸命に踏みしめてイリチヤは真の頭越しに窓の外を見た。窓の向こうに——

別のヘリがいる。

機体の下に火器の砲身があり、その銃口がこっちを向いている。

（——銃撃——！？）

陽光を眩しくはじく天蓋の内部に操縦者のシルエットがある。操縦者は片手になにか持ち、口をよせ、しきりに口を動かしていた。

「ベネトナシュ！！！」イリチヤは思いきり声を張り上げた。

「通信機は！！？ スイッチを！！ 早く！！ 外から警告されてる——！！！」

警告はすでに幾度もされていたのだ。ベネトナシュのヘリがブリュッセルから欧州大陸を東へ向かい、隣国との国境に近づきつつある時から、すでに幾度も。

レーダーで追跡され、警告され、威嚇までされていたことに——気がつかなかった！

「撃つなと言え！！ 早く！！ 子供が乗ってるんだ！！」

しかしベネトナシュは、イリチヤの真を抱きかかえていない方の腕を掴むのに忙しかった。彼が欲しかったのは、まさにイリチヤだったのだ。

盗まれ国境を越えようとしているヘリに、死神の形をした黒い影がとり憑いていた。

そのおぞましい様をみることができたのは、おそらく、操縦士が敬虔な人間だったからだ。

歯を食いしばっても悲鳴は勝手に迸り出る。

十字を切り、神に祈り、多大な恐怖と若干の職業的義務感と軍規から、操縦士は引き金を引いた。引き続けた

27・「Kidnap-2」

28・「Damage」へ続く

あとがき

ここから第五部。だけど話もサブタイトルも前回から続いています…

ここしばらく夏風邪でダウンしてました。だるくてたまらないのは暑さのせいかと思ってたら、次々と出てくる風邪の症状、「風邪でしょうねー」と医者さまに言われ、症状がいくらか楽なときにいくらか書き進めてみたものの、結局全部脇へどけて書き直し。ああもったいない～。いらないものはいらないんだけど、背景としては必要だったりする。今みたいに場面が四つ同時進行しているような場合は。

第四部のどこかで『竜門渕めるのは百年前に亡くなってる』いうことを書いてしまいました。いやいや、めるのさんは奈々子ちゃんのお葬式の時には生存しとったじゃないですか。わりと最近まで生きとったとです。でもどこで書いたのか思い出せない。そのうち探し出して訂正します。

2025年9月2日 記

奥付

リ・コンストラクション

第二十七章 Kidnap-2

2025年 9月5日初版発行

著者

峯村 明 [E-mail](#)

表紙素材

[イラストAC](#)

制作

Puboo

発行所

デザインエッグ株式会社